

一 麗かな冬日和の上野鈴木。出足は芳しくなかつたんですが、仲入り前に八分の入り。お目当ての市馬、白酒、小猫が休演の張り紙にがつくり。代演の三人共いまひとつ。一番人気の歌之介は出番ぎりぎり間に合いましたが見事な高座。笑いに飢えた館内は爆笑の渦：弘子さんの評「テンポの良さと展開の妙」（但し当日弘子さんは「萬縁」の仕事で高座に間に合わず）。やつと歳末の寄席らしい好い気分になりました。ほかに受けたのは三三と小円歌、宝井琴調。漫才最悪：天牛さん曰く「悲しくなる」。菊之丞とトリの小里んは平凡。折角四つの寄席の番組表比べて決めたのに代演多く、いまひとつ愉しめませんでした。それでもテーブル付きで酒飲めるのはここだけ。大いに寛げました。

二 竹橋へ戻つて句会。風邪を召され欠席の万里子先生からの下関土産「焼ぶぐ」、弘子さんのうさぎや（上野）の饅頭、小生の蜜柑、正明さんの樽酒「菊正宗」、小生のイタリア赤ワイン”Bas ilisco”と「北雪」（佐渡）の寄贈あり。甘辛両刀遣いの皆さん堪能しつつ、どんどんビール料理を注文。漸く年忘れ句会らしく盛り上つて参りました。

久しぶり弘子さんの披露で早々に切上げ、恒例の二次会。今回トツブ成績の恭延さんの絶唱（イタリア共産党の歌など）、ゆたかさんの詩吟、小生の声色。先生欠席の為、クリスマスソングは無く、雑談（一）社友会での会長社長挨拶（二）天牛さんの学生時代の仏文学の先生像（三）小円歌の艶っぽさ（四）勘三郎の一周忌。團十郎死後の海老蔵。三津五郎、仁左衛門、福助の休演（五）志ん馬の急死。歌之介と飲んだ話（六）喜寿：一灯さん。傘寿：ゆたかさん、恭延さん 等々

三 関係者近詠

顔見世やさてもお軽の掠れ声	弘子	お目当ての休演多し暮の寄席	紀久男
勝鬨に終る討入り冬狂言	全	年の瀬や志ん馬を偲ぶ寄席の酒	全
二の酉やそこでも会へぬ勘三郎	全	熱爛や津軽のうわさひとしきり	小松義人
命日に声色まねぶ師走かな	紀久男	芋食つて長生きしたし年の暮	全
冬鷗宙なる餌を誤たず	堂哉		
冬の朝片道五分の渡し船	全	菓子となる苺や巴里十一区	山内純二
せぬ筈の病気の話年忘れ	惠州	蟻の国とてスクランブル交差点	全
年忘れ落語をききにいそいそと	ゆたか	壺の碑を右へ曲がれと草刈女	全
連れ合ふて笑ひ合えるも暮の寄席	弘子	燈火親しゴツホ画集に父のメモ	全
志ん朝の出囃に沸く師走寄席	全	鳥渡る山河にアイヌ語の呼び名	全

―「天為」11月号

十二月十四日

以上

紀久男記

一点

時雨るるも客の絶えざる牛車かな（由布島）

そらお（天）

冬日さし翠玉の海輝けり（沖繩）

全（紀）

原発止まりゆつたり夕日の冬岬

紀久男（恭）

断食の成仏待つや枯蟻螂

全（天）

老夫婦歩む紅葉のヴァージンロード

猛（敏）

☆ 虎落笛聴き枕頭の灯火消す

恭延（万）

（☆：枕頭の灯火↓枕辺のともし）

借景の寺の庭先紅葉照る（円通寺）

全（隆）

☆ 地異の跡薄雪のせて朝日受く（浅間山）

五郎太（万）

初冬やシチリアワイン頼みけり

全（三）

竿竹の先にきりきり柿を挽ぐ

弘子（青）

連れ立ちて塾へ急ぐや暮れ易し

健介（孤）

木枯や微動だにせず大仁王

全（五）

秋の暮尾道水道黄金の帯

堂哉（敏）

☆ 笑顔笑顔紅葉ほほ染め同期会

ゆたか（万）

そば団子紅葉のもてなし高尾山

全（龍）

巡礼の土手に吹かるる芋嵐

一灯（允）

地上へと紅葉散るなり第二幕

昇（猛）

木枯らしもお詠へ向きくすり喰ひ

亜也（紀）

谷戸（やと）の庭石蒨（つむ）咲く泉水烟る

全（龍）

錦秋の石見銀山ヴェロタクシー（三輪自転車）

天牛（ゆ）

以上 文責 紀久男

平成二十五年十一月句会報

一、今回は先生以下9名出席。投句も9名。紙上選句11名。猛さんの司会で快調に飛ばし、御覧のように盛雄さん、忠彦さんが好成绩でした。亡くなられた和夫さんの奥様からのお手紙、恵洲さんらが編集された「紅レポート」、「萬緑」11月号合評の抜粋、恵洲さんが捌き役の連句作品「秋うらら」「木の芽起こし」そしてそらおさんも参加の三吟歌仙「我が影の巻」を回覧。

先生寄贈のおつまみ：海苔巻とブロウニイ（オランダ）、正明さんからの「山田錦」（白鹿）、五郎太さんから「初孫」（山形）を賞味しつつ、健診前日や体調不良の人々など酒量を抑え気味でいまひとつ氣勢上がらずでした。

社友会総会（規雄さんも出席）、立山雪崩遭難（50年前の初滑りで下山したらケネディ大統領暗殺の衛星TV初中継）、中国の防空識別圏設定等を話題。

二、関係者近詠

貌知らぬ亡父の郷里阿波踊	万里子	見上ぐれば待ち兼ねしこの秋の天	恭延
車椅子連ね踊りの手の撓ふ	全	――「萬緑」――12月号	
落蟬のやうに整しく瞑らな	全	山形の藁塚（にお）背にして妻立てり	規雄
失恋歌ばかり雨月の歌謡ショー	全	――「NHK俳句」12月号	宇多喜代子選
再読と新刊を寄せ秋夜長	眞希子	一刷けの雲を泛べて山眠る	允章
署名せん小さな躊躇花茗荷	全	末枯れの野面あまねき夕日かな	全
説教済み讚美歌に覚め敬老の日	全	谷紅葉愛でしや隠れ切支丹	堂哉
遺言めく夫の呟き虫と聞く	全	秋の浜老婆自在に竿秤	全
天も地も我物と統べ鷹渡る	弘子	原発停止歪む夕日の枯岬	紀久男
これ以上首上がらずも鷹柱	全	食べ切れぬ鮪をヅケに朝酒に	全
乗鞍の稜線長し草の絮	全	座布団（ざぶ）代り万歳連呼の冬相撲	全
座の芯に確と草田男ぬくめ酒	全		

十二月十三日

以上 紀久男紀